

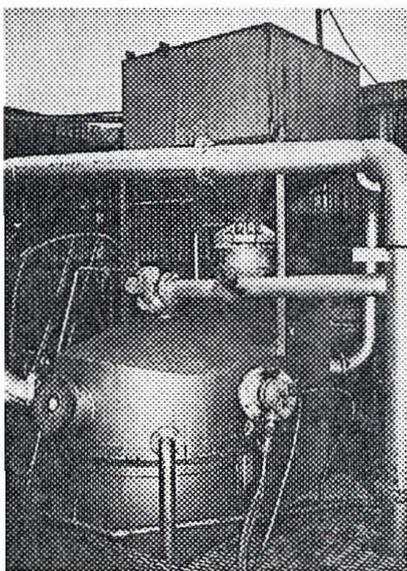
溶融炉でゴミ処理

日本環境保全が超小型開発

有害化合物を無害化

日本環境保全(茨城県牛久市上柏田4の1の1、社長杉山静素氏、☎0297・74・4351)は、超小型溶融炉を使用したゴミ処理システム「JB-O21」の開発に成功した。システムには三種類の耐高温焼却炉をそろえた。特に処理の最終段階に使われ、システムのかなめとなる溶融炉は、初めて二千二百度Cの高温にも耐えられるセラミックス製の炉壁素材を開発、採用した。これらにより、ゴミ焼却における最大の難点とされてきた重金属類やダイオキシンなど有害化合物の無害化を実現したのが最大の特徴。「三千人から出るゴミ処理をわずか八百平方メートル規模の敷地に設置できる」(杉山社長)のもざん新な点だ。価格も従来タイプの三分の一程度に抑えたという。

セラミックス製 2200度Cに耐える



超小型溶融炉使用の
ゴミ処理システム

「JB-O21」は、焼却炉として自動車、テレビ、冷蔵庫などの粗大ゴミ焼却炉、ゴム製品や農業用ビニールシートなどのタイヤ・ゴム類焼却炉、生ゴミ、紙おむつなどのロータリーキルン式焼却炉の三種類がある。処理能力は日量約五十ト。

超小型溶融炉では、各焼却炉からきた焼却灰を五分の一ほどに減容し、スラッジ(残存物)

は建材・骨材として利用できる。また、超高温熔融を可能としたため、従来のように焼却灰の熔融過程で中和剤を使う必要がなくなった。このためダイオキシンなど有害化合物の発生を抑えることができた。

各焼却炉で燃焼によって生じたエネルギーを熱交換器によって廃泥やタイヤ・ゴム類の焼却で発生する重油を収集し、ロータリーキルン焼却炉や溶融炉の燃料として再利用する。

第一号システムが近く茨城県鹿島町に設置されることが決まっている。

ご注意

過去に当社が原情報を著作した新聞・雑誌等の記事は、画面上の閲覧のみが可能です。これら記事は過去に公開されたものですが、現状で利用する際には著作権等が発生する場合があります。利用をご検討の方は当社にご相談願います。

日本環境保全株式会社